

春

映画文学人生論

原作：島崎藤村（1904）「東京朝日新聞」

参考：桜の実の熟する時（1919年） 春陽堂

岸本捨吉	島崎藤村	岡見兄弟	星野天知、	夕影
青木駿一	北村透谷	足立弓夫	馬場孤蝶	
市川仙太	平田禿木	福富	上田敏	
管時三郎	戸川秋骨	堤さん	樋口一葉	

ああ。自分のようなものでも、
どうかして生きたい

日本で浪漫派の詩人といえ、まず北村透谷と島崎藤村の二人である。私は中学一年生のとき、透谷の「眠れる蝶」や藤村の「千曲川旅情の歌」を知り、感動した。自分でも気取って七五調の新体詩を試作してみたこともある。

しかし、残念ながら、浪漫派の絶頂期は短命で終わった。その後、蒲原有明や薄田泣菫など象徴派の詩は私にはよくわからない。「あはれ、あはれ、蝶一羽、破れし花に眠れるよ」という透谷は自殺し、「雲白く遊子悲しむ」藤村は詩作をたつて、自然主義の散文に転向した。

『春』は自伝小説で、明治二十五年から二十九年まで、藤村が二十一歳から二十五歳までの五年間をふりかえって書いている。執筆の時期は藤村が三十七歳になった明治四十一年。

作者がすでに浪漫派ではないので、あまり面白くないだろうと思って無視していたが、今回『夜明け前』を読了した余勢で、読むことができた。

自伝小説だから、藤村が主人公、透谷が副主人公で、その他、『文学界』同人の星野天知、戸川秋骨、平田禿木、馬場孤蝶、さらに上田敏、樋口一葉、田山花袋・柳田国男らしき人物が登場している。西欧の浪漫文学の影響を受けた青年たちが展開する近代文学史の青春期を描いた作品としてあれこれ想像しながら読むと面白い。



春

映画文学人生論

浪漫派を宣言するマニフェストのようなことばは、北村透谷の「恋愛は人世の秘鑰（ひやく）なり」。秘鑰とはずいぶん難しい漢字だが、意味はなんとなくわかる。要するに恋愛至上主義だ。

『春』の主人公岸本捨吉は明治女学校で教え子に恋をする。盛岡藩士の娘で、岸本に心を寄せているふしもあるが、許嫁がいた。悩みぬいた末、岸本は学校に辞表を出し、放浪漂泊の旅に出る。

西行や芭蕉の境地をもとめたのだが、青二才の書生には金がない。ついに行き詰まって国府津に近い相模湾の海に入水しようとしたが、思い直して小田原にいる青木（モデルは透谷）を訪ねる。

青木も妻子をかかえて貧しい暮らしをしていたが、失意の岸本をなぐさめ、金を貸してやる、岸本は生きる気力を取り戻し、東京へ戻った。

ところが、しばらくすると、青木のほうが妻子を残して、自殺してしまった。許嫁と結婚した岸本の恋人も病気で死ぬ。岸本は人生とは何ぞやという疑問を抱きながらも生き続ける。「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」。

透谷と藤村は似ている。文才に恵まれ、功名心が強く、恋愛が人世の秘鑰なりといいながら、品川の遊郭で遊ぶこともあった。享年は透谷二十五歳、藤村七十歳と違うのは、藤村が浪漫主義から自然主義に軌道修正した結果かもしれない。

小諸なる古城のほとり雲白く遊子悲しむ 藤村